「佐賀藩における鷹狩の文化史的研究―伝統の継承をめざして―」 荒井流鷹匠 石橋美里

1. はじめに

本研究は既存の先行研究や参考文献をもとに、県内の鳥獣供養塔7件の内4件の鳥に関する供養塔及び1件の狩猟関連石碑を調査し、旧佐賀藩鍋島家における鷹狩りを文化的な側面から検討するものである。(※本研究では文化の定義を人間が理想を実現していくための精神の活動及びその成果を文化の定義)

☆国内の鷹狩りに関する研究の課題

国内の鷹狩り研究は<u>根崎光男</u>氏や中澤克昭氏らによって、主に江戸を中心とする<u>幕藩体制の下でのみ</u>研究が進んできた。近年、福田千鶴らを中心とした全国の教授らによる一斉研究の成果により<u>地方の鷹狩りには独自の多様性があった</u>ことが解明された。佐賀藩における鷹狩りの先行研究は伊藤昭弘氏が<u>政治史の観点から</u>述べている。

- ◎基礎的考察もまだ十分ではなく、鷹匠による鷹狩に関する論文もまだ存在していない現状。
 - ⇒様々な研究領域からの研究考察が必要。

アカデミックな場に日本の鷹匠が全くいない。

自分たちの口伝えでのみ伝承が継承され、自分の流派の特徴が分からない現状。

- □世界における鷹狩りに対する動向
 - ⇒1976年から UAE 故シェイク・ザイード殿下によって国際的な鷹狩に関する話し合いを開催。
 - ⇒2018 年にユネスコが世界 11 ヵ国の鷹狩りについて「鷹狩は生きた人類の無形文化遺産である」と認めた。 (フランス、スペイン、チェコ、ベルギー、モロッコ、サウジアラビア、カタール、シリア、UAE、韓国、モンゴル)
- ◎各国で猛禽類と鷹狩文化の保護意識が高まる。

○本研究の対象

- 「佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告」
 - ⇒掲載される鳥獣供養塔及び御狩場史跡7件の内の4件

周辺の地理的地形・生物相

- 「葉隠」
 - ⇒名前の挙がる鷹匠と鷹狩り逸話

伊藤昭弘氏の先行研究で名の挙がる鷹匠

- · 「白石町史」、「九州文化図録撰書」
 - ⇒鷹狩りの拠点の実態

現存する史跡を基に分析、当時の鷹狩り拠点(狩猟の際の休憩所)

2. 鳥獣供養塔 現地調査の結果

- ・図1~図4までは「嘉瀬川をはさんで西側の西目と呼ばれる御狩場」(伊藤2019)に位置。
- 図5は鳥塚。
- ・供養塔は先行研究で鷹狩を好んだという藩主と建立時代が一致。
- ・ほぼ地形が変わっていないことが図6、図7で分かる。
- ◎初代藩主鍋島勝茂 66歳で建立 猪、鹿、その他獣、鶴、白鳥、雁、鴻、大小鳥類壱万羽
- 鶴、白鳥、雁、大小鳥類壱万六千六百羽 ◎4 代藩主鍋島吉茂 66 歳
- △8 代藩主鍋島治茂 48 歳 1793 年 寛政 5 年 9 月 樋口形左衛門建立
 - □10 代藩主鍋島斉正(直正) 16 歳 1831 年 天保2年 夏 佐賀藩家臣西牟田安太郎 鳥類幾千万羽

・供養塔中の「6」に着目

図2の供養塔も鳥類殺生の業生転滅をはかって建立されたといわれている。六道輪廻転生も基は修験者た ちが山岳修行に臨むのに際し、身を清めて穢れ無き山岳の境に入信するために用いられたものを起源。→ 鍋島家の英彦山信仰が背景にあったものと考えられる。









図1供養塔筆者撮影 図2供養塔筆者撮影

図 3 供養塔筆者撮影

図4供養塔筆者撮影







図5供養塔筆者撮影 図6筆者作成地理院地図 図7白石南郷坂田村(1788年)(佐賀県立図書館所蔵)





図8 真鶴マナヅル

図9鍋鶴ナベヅル

追跡調査の結果、図8の群れ約100羽が伊万里の山代の長浜干拓に暫く留まっていたことが分かっている。 以下のツル類の飛来がある当時は、湿地帯が広かった。

3. 鷹狩りに必要なもの

- 1. 鷹狩りのための環境づくり
- ・簡単に間合いを取らせてくれる鶴に対し、鷹で獲れなかったということはあり得ない。その為、<u>当時は鶴がとても敏感であったならば中々間合いに入らせてくれなかったものと見る</u>。現代のツルは「人<u>慣れした鶴</u>」である。勝茂は鷹狩の際、<u>近づかせてくれなかった鶴</u>に対し遠くから鷹を羽合わせていた可能性がある。獲物を獲ることを最優先にするならば鷹狩は少数で行った方が効率は良い。
 - ・春のうちに白石・山口・佐留志・芦刈、佐賀郡新庄・蠣久・に「寄」を設けさせた。

2. 鷹狩のための人づくり

先行研究では、勝茂公のお抱えの鷹匠の数名の名が判明しているが、多くの者の知行は明らかにされておらず、 身分に関係なく勝茂が引き抜いていたのではないかということが指摘されている。中世に入ると鷹の医学も発展 し、薬草を煎じて鷹に飲ませ、お灸を鷹に据えるといった療法も各鷹流派で誕生し、それらの「知」を獲得する 事で権威を高めていった。

- ○勝茂の鷹狩りの御供→白石の御鷹屋番(小野三郎左衛門)、白石の庄屋(吉村新兵衛)➡百姓。
- ○西目の御狩の最中に御供の衆に加え、そのまま後に鷹匠になる者。身元のはっきりしないまま「御鷹の道は上手である」というので召し抱えられた者。小姓から鷹匠になる者。など。

→勝茂は<u>身分や知行を問わないどころか、鷹や鷹狩についてもよく知らない人材</u>をお抱えの鷹匠として配属し、彼らを育てていた可能性がある。主君の周りの様々な事情もよく理解し、鍋島家の今後の治世に必要な人材を育て、江戸や国元双方の事情にも通じることができる「御鷹匠」に育てたかった可能性がある。

【史料1】「大物頭、弓鉄砲頭に仰せ付けられた者は自身で一人鷹狩りをして、その時の人の働き、目心の利き様、物の見積もり、その外器量、不器量の事を見るのに、鷹狩に勝る物はない。」

◎この時期の佐賀藩の杵島郡白石地域は龍造寺隆信の居城(須古城)を中心にまだその残党の火種が燻っている時期でもあった。秀屋形の建設、鷹屋神社(図12)境内に鷹屋設置が行われ、その後の秀林寺建立といった鍋島藩西目の鷹狩りの拠点が須古城から5キロ程度の距離に建てられた。

3. 鷹狩のための拠点づくり

鍋島藩家老の道虎はその時江戸にいた勝茂から慶長19年2月に以下のように指示を受けている。

【史料2】追而申候 我等儀 八九月分可罷 越と存候 然者 白石へ

少々作事申付候 … (略)

【史料3】白石作事 鏡の間 台所 次の間 物置所皆付申候

【史料4】一 御館跡 四方御囲堀相附 堀向水土井外迄 弐町八段四畝拾九歩 (略)

秀屋形は総面積が 3 2 7 m (一町=六〇間= 1 0 9 m。) に渡り、四方を囲い堀で巡るようになっていた。<u>台所</u>も作られていた。

○現在の武雄市橘町鳴瀬には「殿様が鷹狩りの際に利用された」と伝わる金峰山西岸寺に数多くの史跡がほぼ 現存している。九州文化図録撰書に基づくと、成瀬宿は佐賀本藩領、成瀬村は蓮池藩領であった。西岸寺から北 の山畠一帯(杵島山に含まれる)は鷹屋と呼ばれ、屋敷跡も存在していることから鷹や鷹屋の管理者がこの地に いた可能性が高い。佐賀城の周辺にも支藩や本藩の鷹屋跡が存在しており、多久家文書には度々鷹屋が台風によって倒壊していることが記されている。当時は日当たりも風通しも求められた鷹屋は台風や豪雨などの自然災害などで倒壊していたことが伺える。【史料5】一面々門出口二、此中立置候鷹屋之儀、大風二吹倒候二付面而、東之鷹屋近所二見合、可相立由申遺候得共、当分可然在所無之付而、大木庄左衛門鷹屋近所二見合、相立可申由被申越、可然存侯、其通二急度可被相立事尤二候



図 10 厠 筆者撮影

図11 藩主専用の昇降口に飾られた抱き杏葉 筆者撮影



図 12 西岸寺の庭 筆者撮影

図13 凡鐘 筆者撮影

○まとめ

鷹狩りに関しての研究はごく一部が解明できたに過ぎないが、本研究では葉隠における西目の狩りの逸話が多数存在していた。英彦山の修験道における六道輪廻の宗教概念下の下、鶴や雁の鳥獣供養塔は藩主の鷹狩りに貢献した生類の魂を慰めるものだったのだろう。鷹狩によってもたらされる効果を必要としていたものと思われる。今後、鷹狩りに関する多面からの研究によって他の研究分野も進むのではないか。



図 14 オオタカのメス雛 図 15 若いオスのオオタカ

●主な参考文献

- ・和田謙寿「仏教習俗にあらわれた数の考察―供養習俗を中心として―」駒澤大學佛教學部研究紀要 28 31-1970
- ・木下亮二「佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告」(青潮社、昭和 11 年)

福田千鶴・武井弘一「鷹狩りの日本史」(勉誠出版、2021年)

- ・九州文化図録撰書(図書出版のぶ書、2001年)
- ・山口昭男「葉隠」(上中下)全3冊(岩波書店、2011年)
- · 白石町史(佐賀県杵島郡) 著者 白石町史編纂委員会 (昭 49 年)